軒廻り、ケラバ廻りと三段、四段と付いているから塗りにくい手間がかかった。

ここの壁は今塗ったばかり。ピカッと光っています。顔が映る。

こちらも。そろそろ終わりです。

その他屋根瓦廻りでは板の張替え樋を内樋式にし、下にしぶきを落とさないことにする。板は杉板に張り替えてこの上に鋼板を張っていきます。

本葺瓦の軒先から二列分の手直し下に下がっていた瓦を正規に戻す。軒先がピンとしました。

蔵の内部の木部も虫食いや腐朽部分を修繕します。
床板、腰板を取り払い材料を入れ替えます。見た目は蟻害でも、芯はしっかり残っている材はそのままです。別方向の土台も修繕。
床下の大引きや、束も取替。
この足元は急遽入れた補強材です。

これから、乾燥結果により漆喰上塗りを行います。今の時点ではまだ乾燥不十分で塗れませんでした。次回に報告します。

住まいについてのいろいろな話し　第15回

外装材のあれこれです。日本、特に都市部では防火の観点から規制がかかっており、多くの地域で燃えるもの、例えば木材なんかはほとんど使えません、モルタル塗りやサイディング、鋼板などで覆います。

モルタル塗に塗装

多くはこのタイプです。最近は窯業サイディングや鋼板サイディングも多用されます。

どれも建設省の規格にあった作業や物を使えばある一定の時間燃えない力を持っていますが、規格品の範囲を超えないので画一的になります。

外装で簡易に張るのがトタン波板ですが、火に関して言えば焼板のほうが宜しいですね。

トタン自身は燃えないのですが内側の温度が早くに木材発火点にまで達するので内部で燃え出す。焼板は燃えつつも内部には熱を伝えにくいので少し時間がかかるというものです。

タイル貼り

これは何百種類とあります国産メーカー、輸入物といろいろです。私、タイルは国産品がコストパフォーマンスでは一番だと思います。その理由はまず規格の寸法がきっちりしていて、100 枚あれば 100 枚とも使えます。輸入品は 100 枚の内使えないものが 20～30 枚、厳密に見れば 4～50 枚使えない（寸法が不揃い）ものがあります。

それでは足りなくなるので、苦心しながら使うようにします。これの大きな原因はタイルは焼き物ですから、当然縮む、反る、捩じれる、は当たり前なのですが、日本以外ではタイルは不揃いが当たり前で生産業者も当然ですという返事をします。ただ日本のお客さんはそれがダメなのですね。

似たような話で、節のある木材を使ったら、節があるのは欠陥商品だといわれたことがあることです。イエイエ、木には節があって当然ですといっても聞いてもらえない。枝の無い木なんてどこに生えているのか聞きたいぐらいです。

石全般（御影石等）

町家で外装に石を使うのは少数ですが、昭和初期の町家は道路面に出格子の代わりに石を腰張しその上に格子(木製ではなく丸い真鍮のパイプを使った)を入れてあるものが多いです。よく見ると大島などのいい石を使ってあり修繕などのときに今では無い石のときは困ります。

ただ、現在国内での石の加工業者は減る一方です。主流は中国製で、石も加工も現地でやり、値段は半分以下となれば誰もが飛びつきます。ただ、これもやはり精度が悪く本当にきっちりの寸法が必要なら国産にします。

かなり前に、スエーデン製か、ノルウエー製の石の床材を注文したとき、船便でもう入る、あと 1 週間で入ると言われたものの入らず、結局 2 ヶ月後に入ったという苦いことがありました。ギリギリまで待って何とか貼り終えたのですが、船便の輸入物は怖いと、心底思いましたね。

土塗壁（漆喰壁　浅黄壁等）、板張り

新築では法的な規制がありほとんど無理です。話しではやりようがある様には聞いたことはありますが、時間と費用がかなりかかるのではないか。改修ではよくというより、町家ではほとんどこれです。手間暇掛けて塗りあげるとやはりいいですね。

漆喰は何も日本だけではなく、世界中で古くから使われています。それだけ実績と経験がある材料です。余談ですが、国内では幅の広い柾目の板がもうあまり取れないので、同じような材料の入手に困ることがあります。やむおえず加工品を使いますが、昔はいくらでもあったんだろうなと感じます。

材料選びは建物の意匠に大きく関わります。自然の材料は年月が経つにつてれ、日焼けし、雨に打たれ少しずつ変化していきます。それを歳月が関わった証だと愛でるか、汚くなってきたととるかは心一つです。この頃私はよく手入れされた古い家を見ると肩の力が抜けて安心します。

鴨川　床手摺の件　解決しました

以前ここでぼやいていた、床の手摺の件解決しました。京都市が作成した報告書はここの手摺が 69ｃｍだから直せと指示がでていたのですが、最後にもう一度測ったらなんと 70.5cm で基準クリアしていたのです。しかもどこを測っても 70ｃｍ以上あり、誰がどこを測ったんだと当局に文句を言い、この図面を直せと迫ったら、基準内なら来年その旨を書いて提出すれば良いとのそっけない返事。帰って女将さんと二人で誰が測ったんだ、お前の目は節穴かと(古いな)家の中で叫んでいました。今思い出しても腹が立つ。

こんなところに御陵さんが

ここは東山三条近辺、一見お寺の門のように見えますが、中に入るとずっと奥までやや上り勾配の道が続く。100mほど奥でさらに階段を 10 段ほど上ると目的地の御陵さんです。すごく広くて静かで、木々に囲まれ時間が止まったようです。京都市内には、多くの御陵さんがあり、手入れや掃除をかなりこまめに廻っておられます。

いつも綺麗です。時間ができたら御陵さんを探して廻ろうかと真剣に考えています。

編集後記

今、これを 30 分考えてもまとまらないので、協力者の北岡さんに書いてもらいます。

村上専務、あらき通信の作成お疲れ様でした！

迎賓館行ってこられたのですね～。私は新聞で一般公開の案内を見て連続３回ハガキを出しましたがハズレ。私が諦めて出さなくなった去年、監督の米沢さん、ハガキを出したら１回目で見事当選。

クジ運ないな～。近年和食が世界的にブームですが、カナダに住んでいる友人が「いくら」の作り方を知人に伝授し随分喜ばれたと聞きました。日本の伝統、大切にしていきたいです。　　北岡